



日本一有名なお茶の間

三種の神器のひとつであるテレビも置かれ、家族が集まる茶の間。床はもちろん畳敷きだ。「現在の畳は発泡フォームの固い畳床が多いですが、昔は裏製でクッション性があり、踏み心地がソフトで座り心地もよかったです」と町田氏。

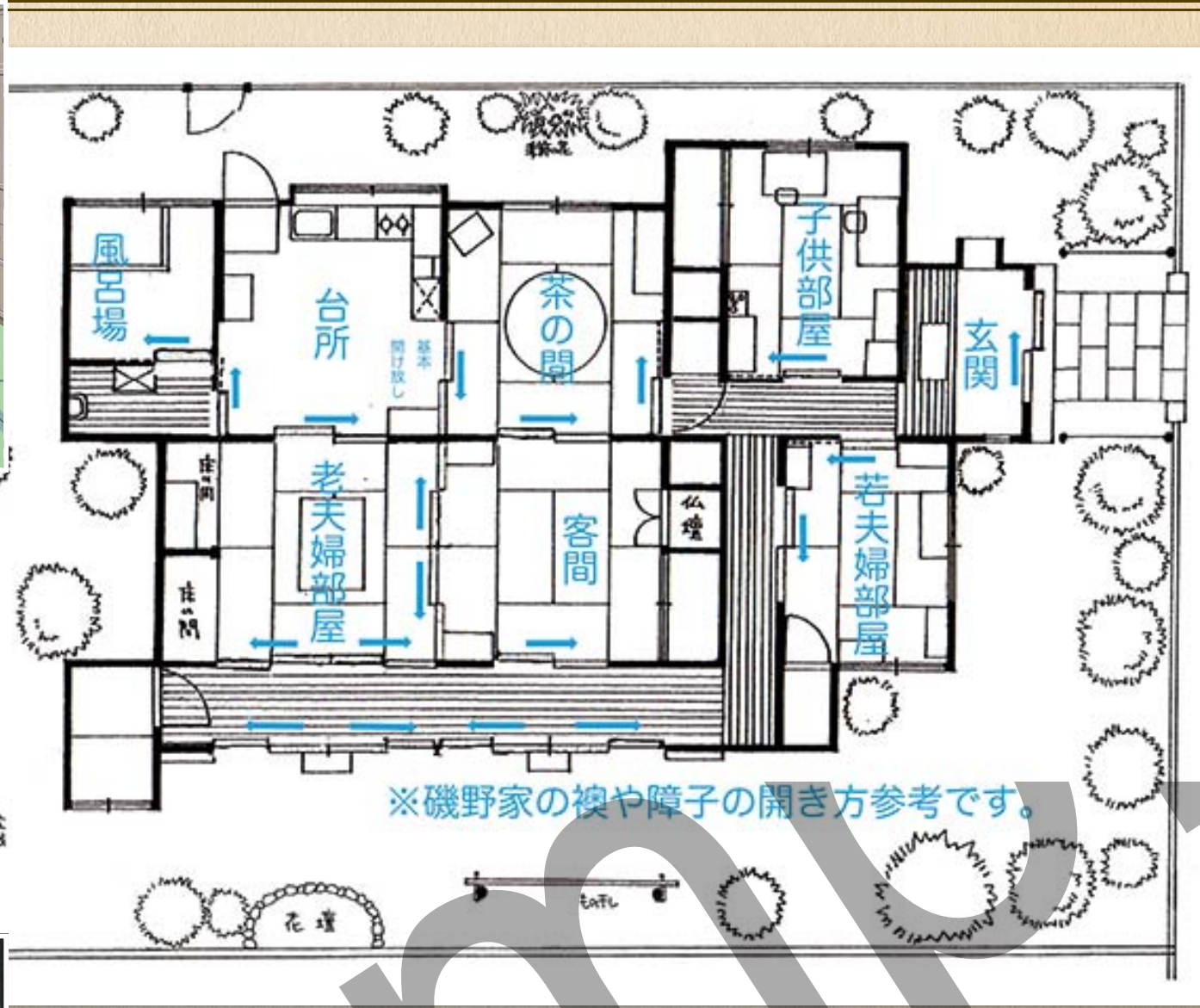
リアルワカメちゃんたち？



昭和30年代半ばの家族。家族がコタツに集まって暖を取り、磯野さんちのタマのようにネコもいる。女の子はオカッパ頭で完璧なワカメちゃんカットだ。



昭和30年代半ばの茶の間。押し入れに布団が仕舞われており、寢床を上げ下げして暮らしていたのがわかる。ゼンマイ式の振り子時計と丸型蛍光灯の照明はどこの家にもあった。



これが磯野家の間取りだ！



アニメ版の磯野家は架空の町「あさひが丘」に暮らす。「外構のブロック塀は昭和30年代の半ばに普及しました。そのころに建てられた家でしょう」と町田氏は分析。それ以前は板塀か生垣が普通だった。原作マンガでは世田谷住まい。当時の世田谷は農家も多く長閑だった。

©長谷川町子美術館

昔ながらの平屋っていいよね



ブロック塀に囲まれた平屋が立ち並び、昭和の風景。木造瓦屋根の家に、ノスタルジーを覚える方も多いだろう。東京の空が、今よりも広く感じられた時代とも言える。路上でゴム飛びなどをして遊ぶ子供たちの姿が目につく。

アニメ『サザエさん』一家 磯野家に学ぶ 一家だんらん平屋暮らしの幸せ

「敷地面積は推定80~100坪。昔からこの地にいた一族でしょうね」と町田氏は推測する。「昭和30年代に建てた家だとすると、内風呂があるだけで裕福です。仏間を兼ねた客間まである。当時の感覚では豪華な家と言っているんです」。

平屋でない家に住む全ての日本人にとって、最も身近な平屋といえば、この家だろう。なぜ磯野家はいつもにぎやかで楽しそうなのか。そしてなぜ、我々はその心に憧れを抱くのか。

文/小林良介 協力/渡辺恒也(フジテレビ)

茶の間を中心に家族が寄りそう昭和の暮らし

平屋が憧れの家屋として注目を集めるようになる以前から、国民的な人気を長年にわたって集める平屋がある。そう、1969年から続くアニメ『サザエさん』の磯野邸だ。磯野家の家と暮らしは、昔ながらの平屋が一般的でなくなった現在も、日本中の視聴者の支持を集めているが、なぜそのように世代を超えて日本人を惹きつけるのか。昭和の暮らしに詳しい庶民文化研究家の町田忍さんに聞いた。

「茶の間が家の中心という、典型的な日本の暮らしですね。広い家でも狭い家でも、昔は茶の間に家族が集まっていたんです。ちゃぶ台で食事をして、子供部屋がない家ならちゃぶ台の上で子供たちが勉強もします。小さな家ならちゃぶ台を片付けて布団を敷いて寝る」

茶の間を中心に家族が自然に集まることで、家族間の絆は意識せずとも深く結ばれることとなる。家族のコミュニケーションが今よりも豊かにあった時代に、核家族の時代を生きる現在の人々は憧れを抱くのも無理はない。

また、昔ながらの平屋には暮らしを快適にする知恵が数多く詰まっていると町田氏は語る。「窓が多いんですよ。大きな引き戸で開放感を感じられる。夏の夜は窓全開で、蚊帳を吊って蚊取り線香を焚いて寝ていたんです」

それが典型的な伝統的日本住宅で、磯野家もそんな暮らしでしょう。塀で囲まれているから、外からの視線も心配いりません」

また、各部屋が障子や襖で開くようになっており、いざとなれば大広間にもなる造り。冠婚葬祭などの際には親せきや近所の人など、大勢が集まることのできる間取りなのだ。そうした利便性も、昭和の家にはあった。

「サザエさん一家の仲の良い距離感、平屋だからそのコミュニケーションで、みんなが部屋を共用して行き来している」

いつでも家族の気配が感じられる点が、平屋最大の特長だ。「家に年寄りが出て、一緒に食事したり会話したりっていうのは、もうホームドラマでもめったに見ないですから。今の若い人はああいう生活を体験した人はほとんどいないんです。だから年配の人には懐かしいし、若い人には新鮮なんです」

言うなれば、磯野家は元祖二世帯住宅。平屋というひとつの空間で、三世代が密なコミュニケーションを取り合う、笑顔とふれあいに満ちた温かい家なのだ。

平屋だからこそその豊かなコミュニケーション

